

F 5 女性の生活周期に関する調査
実践女子学園 関 登美子

目的 昭和57年の学習指導要領の改訂に伴い高等学校のカリキュラムは家庭科に関する時間数を削減する傾向にある。将来の衣・食・住生活をマネジメントする女子学生の教育にあたっては、この時期に生活周期をどうとらえるかという問題提起を行うことが有用であると思われる。本研究では第一段階として女子高校生が生活周期についてどのような意識を持っているのか、その現状を知るために調査を行った。

方法 昭和58年5月および9月に高等学校1年生150名、3年生100名に対し調査を行った。調査内容は自己の生活周期についてであり、生活周期を教育期、独身勤労期、育児期、中老年期に区分させ、各期における自己の希望する将来像の回答を得た。また、3年生では具体的な内容についての回答も得た。

結果 教育期は20～22歳で終了し、次の2年間間は職場で働き、その後結婚し家専育児期に入る。出産児数は2人で、40代に入ったらば自己の第二の人生をとというのが典型的なパターンであった。2世代または3世代同居については、まだはっきりとした考えを持たないが、老年期において夫婦ともに何らかの仕事をもちボケないように日々を過ごしたいと考えている。3年生では夫の死後に妻が死亡するというものがほとんどであるが、1年生では夫よりも1日でも前に死したいたいという者がやや多くみられた。